

『邪馬台三国志』ダイジェスト版 倭の生い立ち 1

①徳治と神国（神仙の国）づくりを謳った五帝期に、初代上帝で地の神だった黄帝の一門が四三〇〇年前（縄文中期後半）に北九州に渡って来て、神国・四方の国づくりを始めた。

黄帝を奉る彼らは、福岡平野に那珂つ国を興すと、東西南北四方に忠臣を配して国邑を守ってきた。その四方とは、北の玄界灘沿岸を治める黄泉国（鬼国、闇見国、月夜見国、月読国）、東の国東（くもがた）に由ると称する杵築国、炎帝（神農氏）末裔と言ひ張る南の火神族・その



配下の熊族（熊本以南）、そして西の海神国（筑紫平野）だった。
【玄界灘沿岸の地名】、博多近くには那珂・那珂郡・那珂川の地名があり、その北に暗黒の幽冥界を連想させる玄界灘・玄界島・玄海の地名が残る。

この国は筑紫島全域をくまなく治めると、山陽道・山陰道を突き進んで出雲・安芸・吉備・畿内へ乗り出し、要所要所に分国を立ち上げては先住民に神国づくりや丘での焼畑農法を教え広めた。晩期には、北陸や東海辺りまで迫っていた。

【橿原遺跡】（奈良県橿原市）、縄文晩期の東北地方で使用された亀ヶ岡式土器が橿原遺跡から大量に出た。一方、橿原で造られた縄文晩期の土器が東北南部から北九州にかけて出土する。

この時期の那珂つ国王は、玉つ宝七つを奉じながら、

「もし痛むところ有らば、この玉つ宝をして、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十と云いて振るえ。さすれば、死人も返生りなむ」という呪文を繰り返して唱えることで、不老不死が叶うと信じて神国三昧に明け暮れていた。

②前四七三年、太伯兄弟につながる呉王夫差が越王勾践に滅ぼされた。江南や斉に散らばっていた呉の遺民たちは、筏船や帆船に分乗して琉球諸島・朝鮮半島に流浪した末、蓬莱島と思しき筑紫島の西北部や唐津湾岸にたどり着いた。

そこで湿地帯を開拓して水田稲作に励む一方、日の鏡三面を奉じながら日の神を称える天^{あめ}之国を興した。ついで、那珂つ国に少しづつ接近して水田稲作の手ほどきをしたり、環濠集落をつくって国邑を守る術を教えたりしていた。その後の那珂つ国は、失地回復をめざして天^{あめ}之国勢ともども天地と銘打って北陸・東海に攻め入ったが、東や北から繰り出してきた縄文勢に阻止された。

【菜畑遺跡】、夜臼式期（縄文晩期末、本書のいう敵之国王朝期）の水田跡下層から、さらに百年以上も遡った縄文晩期後葉（前五世紀）の水田跡四枚や山ノ寺式突帯文系土器が出た。炭化米も二五〇粒ほど出土した。そこでは、直播きだった。

③前三三四年頃、蛇神をあがめた夏^か后^{こう}帝^{てい}小^こ康^{こう}や勾^{かぎ}踐^{せん}につながる越国が楚に滅ぼされた。東の海上に漂った越オロチ族は薩摩の坊津辺りに大挙襲来して足がかりを築くと、好を通じてきた熊族の手引きで福岡平野になだれ込んで那珂つ国・天^{あめ}之^の国^をを叩きのめし、その神器を奪って山分けにした。結果、那珂つ国は中つ国と改名させられた上に、黄泉国・杵築国と共に辺境の出雲に追いやられた。一方の天^{あめ}之^の国^はオロチ族の旗下で越流米づくりを営々と強いられてきた。

この越オロチ族は、佐賀平野の吉野ヶ里丘陵に一門重鎮を策封して筑紫島全域を切り取るや、夏王朝のごとく九州に分けて統治した。それと同時に、福岡平野の那珂川中流域に都を定めた。



その後、瑞宝十種を天璽（天神の印し）とする厳之國王朝と銘打って怒涛のごとく東征し、摂津に小千族、奈良盆地に小蛇の三輪氏、出雲にオロチ佐太国、北陸に本家筋のオロチ族（高志のオロチ、後世の越智氏）を策封して越流稲作に励んでいた。とりわけ三輪氏は、財力・軍事力で本家に引けを取らなかったことから、東方をまとめる副都の役目も任されたらしい。

☆越の字は漢音では越、呉音では越と発音して、越は和風の読み。
☆板付遺跡・江道遺跡（岡山市）・牟礼遺跡（茨木市）・中西遺跡（奈良県御所市）・服部遺跡（滋賀県守山市）で、縄文晩期末の水田跡や水路・農具・炭化米が出た。

その瑞宝十種とは、死返玉など玉四つ、瀛つ鏡・辺つ鏡、オロチ軍団を統率する八握剣、船団を指揮する際の蛇の領巾等々だった。この中の玉四つと蜂の領巾・品物の領巾は、那珂つ国から奪った神宝、鏡二面も天の国から強奪した鏡だった。

熊族も那珂つ国から熊の神籬を取り返した上に、玉三つ（羽太の玉一・足高の玉一・うかかの赤石の玉一）を奪い、天の国からも日の鏡一面をもぎ取って熊族神宝として奉ってきた。

この時期、厳之國王朝は、雲上に築いたとする水天宮（天空の水の都）から地上を治めている風に装いながら、オロチ族一門や天の國勢・中つ國勢らに天命と称する詔を連発していた。
④前二三〇年、戦国の雄・韓（周分家）が秦に滅ぼされた。祖国を失くした韓の流民たちは、朝



魁、水田稲作の立役者、神代以来のオロチ族・ワニ族の統率者として振舞ってきた。その国のかたちは、水神が火神を担ぐ水火（水穂、瑞穂）国であり、国の目指すところも「水田稲作に勤しむ国」だった。この王朝は中つ国の意向に沿ってのことか、九州制を廃止して黄帝期の天地四方からなる統治に切り替えた。

筆頭の重鎮、日高の高皇産霊は鉄劍十握劍と天（水）軍を共に賜ることで、こころ触れ回っていた。ひだか たかみむすび とつかのけん

「この十握劍でもって、倭国王朝の天下を末代まで守り抜いてみせる」
倭による支配が微動だにしないと分かると、それまで東方に散らばっていた三輪氏などの越オロチ族、鴨族・ワニ族などは、東勢に競り勝ちたい一心から倭の軍門に降ってきた。それと同じ

鮮經由で唐津や福岡平野西に渡来し、日の神を称える日高国を建国した。その時、厳之国王朝は天之国を率いてこれを征伐しにかかったが、大敗して宗像や玄海（遠賀川西方）に押し込められた。やがて日高と天之国は、互いの先祖が周王朝につながるのと知るや、一転して周政治を理想と仰ぐ倭（陽茂台）国を唐津湾岸に共

立した。以後、厳之国本家や一門は天之国に呑み込まれてしまい、天（厳）之国一門として立ち回っていた。
これら天（厳）を支える家長の中には、自身の名に天の字を冠して天照神と名のる者がいた。天（水）や厳（水）も、海とも海部とも語って海の民だと強調してきた。

火神を称える厳（火）も火と穂の字を独占して、青銅器づくりの

時期に大阪湾岸の南に副都が設置された。

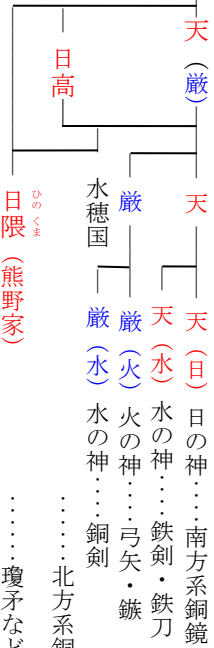
倭はさらに東海や北陸に侵攻して領土を広げる一方、日高と天（厳）からなる分家・日隈家（ひのきま）を興して都近くに侍らせ、これに倭王である日の神の警護とともに、熊本平野以南の熊族懐柔や開拓も背負わせた。そうした上で、これら三家による支配体制に切り替えた。その際、日隈王に玉飾りのついた銅矛、天瓊矛を授与して、

「王朝を守護する時以外は、いかなる理由があろうとも戦さをしかけるでない。矛を逆さに持ったままで動くでない」と厳命していた。

熊本平野に移り住んだ日隈は在郷の熊族を丸ごと抱え込むことで、熊族が縄文期から奉じてきた神宝、日の鏡・熊の神籬などをそっくり譲り受けて、日隈神宝として奉ってきた。このことから、日隈は熊野家とも呼ばれた。瓊矛も逆矛の名で知れ渡っていた。

倭国王朝 天（厳） 之国 十日高国（戦国七雄・韓の一門） 高天

前二〇年頃



- 〔国の祭器〕
- 太氏や大倭国：銅鐸、豊国：銅戈、三輪オロチ族：鉄剣・鉄刀
- 『晋書』や『魏略』逸文、「倭人は）太伯の末裔と自ら言う」
- 日隈（熊野家）
- 瓊矛など日隈神宝

その後も、倭は青銅器づくりに長ける太氏と共に火神を称える大倭家を共立して、筑紫国東部

(福岡県南東部と大分県)に策封し、あわせて都にも住まわせた。この家はやたら分家を増やして力をつけたことで出雲に移封され、出雲・秋(安芸)・伯耆・因幡を治める家柄に抜擢された。そのまた後、福岡平野に遷都した倭は河内や和泉に置いていた副都を奈良盆地に進めて、本格的な東方統治に乗り出した。この国策の下で、大倭家は東の領土拡大、水田稲作の普及、青銅器づくりの推進、東方に散らばる中つ国勢の見張役を担って一門もろとも奈良盆地の唐古(田原本町)に移り住み、月の都と呼ばれる副都の政や軍事を取り仕切る家柄に昇った。以後、奈良盆地一円は大倭と呼ばれ、その分家は東海一円に乗り出した。

【宇木汲田遺跡】(唐津市)、弥生前期末から中期初頭にかけての集落跡。甕棺墓・銅劍五・多紐細文鏡一・銅戈一など多くの副葬品が出土した。貝塚から弥生前期末(二一〇〇年前)の土器、炭化米が出た。甕棺内から銅劍二・銅矛二・勾玉二・管玉二九・銅鐸舌も出土した。

【唐古遺跡】(奈良県田原本町)、北部・南部・西部のそれぞれから、弥生前期の住居跡(一五〇×三〇〇)が見つかり、鍬や鋤の農耕具、斧の柄など工具類、高杯・鉢など木製容器が多数出た。弥生期最古級の巨大な高床式建物跡(南北十二以上、東西七以上)も発見された。大型建物跡は吉野ヶ里遺跡や池上遺跡のものに比べ、一五〇×三〇〇年は古い。

【朝日遺跡】(愛知県清須市)、尾張平野の海近くの小高い所にある。広さは八〇万平方以上もあって、貝塚が点在する。縄文末期の土器に混じり、遠賀川式土器が発見された。

【遠賀川式土器の分布】、弥生前期の遠賀川式土器が伊勢湾や敦賀湾を結ぶ線まで広がり、それ以东に東北系土器が対峙して出る。

大倭家が出雲を去った後の前二世紀前半だろうか、漢朝内部で跡目争いが起こり、これに関わった漢の王族が倭に流れて来た。時の倭王は、主の居なくなつた国東に豊なる国を立てて彼らを

迎えると、海神につながる海部家や在郷の中つ国一門も添えて新たな王家を立てさせた。

当然、豊国は漢族の中から王を立て、神聖動物も漢にならって亀と定めた。さらに高祖にあやかって火神を尊んできた。その後の海部家は豊国庇護下で、別府湾から臼杵湾にかけての地に磐石の地盤を築くことができた。これに恩義を感じた海部家は、丹後や尾張に国替えされて大国のし上がった後も、豊系の火神王を担ぎ続けることになる。

これら倭三家・豊国・大倭家の上に立つ倭王は、日高と天（日）から交互に選ばれた。両家が倭王を出せない事態に陥ると、豊国か日隈の皇子が本家の養子に入って倭王に立つこととされた。その倭王は政の大事が生じた際は、日高と天（厳）の重臣らを一堂に集めてとことん協議させていた。その協議の場は、双方の一字ずつを取って高天の原（高天原）と呼ばれてきた。高天の原の高は日高、天は天（厳）の意である。

倭本家の中でも、日の神を祀る天（日）王や日高王は、周の太陽信仰を受け継ぐことから、「祖霊は天に昇って太陽となり、天上を支配する日の天神となった。天神は黄金の光と共に我らを地上に降ろして、その統治を命じられた。よって我々は生れながらに天子だ」という天神信仰を一途に信じてきた。

その当時から、日の神を祀る場では、倭王は祭壇正面の玉座（日前）に、日高王は倭王左の心もち高い座（日高）に、天（厳）王は玉座背後ながら祭壇正面に向かう座（日向）に、豊国王は倭王の右に座をとった。日隈王は最後列の片隅（日隅）に畏って控えていた。天神が立った際には、祭壇横に高御座が設置された。こうした経緯から、日隈は日隅とも呼ばれた。

以上を踏まえて、各家の祀る祭器について筆者なりに考察すると、日高は北方系銅鏡（漢式鏡）、天（日）は南方系銅鏡（時には北方系鏡で代用）、天（水）は鉄剣・鉄刀、厳（水）は銅劍、厳（火）



は弓矢や鏃、日隈（熊野家）は銅矛、太氏や大倭国は銅鐔、三輪オロチ族は鉄劍・鉄刀になる。この頃にも、水田稲作が西日本に急速に広がった。それと同時に、北九州の遠賀川式と呼ばれる弥生前期の土器が伊勢湾沿岸から若狭湾沿岸にかけて広まった。水田稲作が急速に広がるこの時期、即ち本書のいう弥生期の幕開けについては、唐古遺跡の水稲炭化米の年代、瓜生堂遺跡（大阪府）・朝日遺跡（愛知県）の遠賀川式土器の年代、そしてこれらの遺跡が形成された様子から、ほぼ正確に言い当てることができる。前二世紀後半、時の倭王は豊国に対して筑紫島と都の守備を任せるや、将兵を総動員して東の領土拡大に突っ走った。「この結末は、呉王夫差の二の舞となつて幕を閉じることになる」

倭の生い立ち 2

⑤その隙をねらい、越オロチ族一門として銅劍を奉る葦原家の天叢雲が豊国や中つ国と結託して倭国の都を攻め落とし、豊葦原中つ国なる王朝を福岡平野に樹立した。

この王朝は平野西の早良辺りに都すると、安芸に同門の秋水穂国、淀川中下流域に豊葦原瑞穂国、奈良盆地に大倭豊秋津島を策封した。と同時に、そこに副都を開いた。豊国も配下の海部家を丹後や尾張に移し、両家に副都の両脇をがっちり固めさせた。この王朝の立役者・天叢雲は、畿之国本家を宗像や玄海に押し込んで名ばかりの宗家・宗像家に担ぐと、瑞宝十種を奪って自身の宝器に差し替えただけでなく、本家の座に居座ってきた。



て福岡平野の春日に都を移し替えた。

『漢書』「地理志」、「楽浪海中に住む東夷（倭人）が百余国の上に立って年毎の貢ぎ物を持ち来たり、漢帝に献見したという」

【吉野ヶ里遺跡】（佐賀県神埼市、吉野ヶ里町）、前四世紀ころ、丘陵に初めて集落が現れた。その後、丘陵裾部に大集落が発展して、丘陵全体を取り囲む環濠が後期前半に完成した。その間（前一世紀初頭から七〇〇八〇年の間）に、万を越す甕棺群や巨大な方形墳丘墓が築かれた。この時期に、福岡平野に繰り出すらしい。そこには、三雲遺跡（前一世紀後半）より古い形の甕棺五基が埋葬されていて、その四基から細形有柄銅剣一・細形銅剣三が出た。

⑥前一世紀中頃、この王朝の三代目か四代目が跡目争いを起こし、天下を乱した。

このとき、（有柄）銅剣で蛇神を祀る吉野ヶ里の廠一門が福岡平野に打って出て豊葦原中つ国王朝を出雲に追い払った。ついで廠之国・天之国の重鎮らを丸め込んで、新たな王朝を立ち上げた。

その際、和泉の廠分家は、奈良盆地に乗り込んでいって在地勢ともども暴れまわり、三輪氏や大倭家の蜂起を未然に防ぎきった。その恩賞として、豊葦原瑞穂国に代わって東方鎮護の大役を賜り、副都や東方の政を任された。この廠分家を和泉廠（水）、大倭のそれを大倭廠（水）と呼んでおこう。

前一世紀後半、この政権は漢に朝貢して王朝としての信任を勝ち取り、伊都国なる誉れ高い名も授かることで、伊都国王朝と称し



この少し前、天之国がまたも勢力を盛り返していた。この時期の伊都国王朝は、儒教による政治と神国づくりをごちや混ぜにして祭政を乱したことから、天之国と事あるごとに対立していた。その結果、王朝方は天之国嫡流の幼い姫君・天常立を天神に担がされる羽目になった。そうした中で天之国は、王朝にもたれかかっていた百余国を片っ端から切り崩しにかかった。当時、天之国の伊都国に対する覇権争いは筑紫島だけに止まらなかった。瀬戸内海沿岸から大阪湾岸の国々を巻き込みながら東へ広がって行き、互いが集落を囲った環濠を巡らしたり、高地に集落を移すなどして睨み合ってきた。

一世紀前半、天之国がこの騒乱に競り勝った。銅鏡で日の神を称える天之国女帝が、地の神を祀る豊葦原中つ国王・巖香具土いつのかぐつち（神皇産霊の末裔）と連合して伊都国を古巢の吉野ケ里に押し戻し、

倭奴国なる王朝ヤマト（天地）を樹立するや、旧都脇に天宮（天上の都）を開いたのである。この立役者こそ、伊都国王朝の天神に座していた天常立あめのとこたちだった。

当然、彼女は新王朝の日天神に昇った。一方の巖香具土は国常立と改名して女帝の婿養子におさまり、倭奴国王（倭王）や伊都国王を兼ねながら王朝を取り仕切っていた。この騒乱の最中に、熊襲が貢物を奉じて、またも擦り寄ってきた。

遠く離れた畿内でも、大倭家や三輪オロチ族が天之国に呼応して一斉に蜂起し、伊都国勢を片っ端から絡めとっていた。この功績から、大倭家も三輪氏も再び日の当たる要職に返り咲くことができた。

倭奴国王朝 II 倭十豊葦原中つ国 II 天地 倭国 II 天 (厳) 之国十日高 II 高天 一世紀前半

☆この倭奴国のかたちを図形にすると、前方後円墳と同じ形になる。

『古事記』、「天地初めて発けし時、高天の原に成れる神の名は天之御中主神。次に高御産巢日神、次に神産巢日神。次に宇摩志阿斯訶備比古遲神。次に天之常立神。上の五柱は別天つ神」、

「次に国之常立神、次に於母陀流神、次に伊邪那岐神。国之常立神以下、神代七代という」

『日本書紀』、「天先ず成りて地後に定る。然して後に、神聖、その中に生まれます。故曰わく、開闢くる初に洲壤の浮かれ漂えること、たとえば游魚の水上に浮けるがごとし。時に、天

地の中に一物生れり。便ち神となる。国常立尊と号す」

五七年、倭奴国王の大夫が漢に参つて金印「漢委奴国王」や数々の銅鏡を授かった。

一〇七年、何代目かの日天神に婿入りした倭奴国王は、三嶋鴨族当主の面足おもたろ（於母陀流）神を太夫に立て、彼に闇見国王（后土の末裔）や杵築国王（地の神）も添えて漢の都に参らせた。

『後漢書』「本紀」、「二年（五七年）春正月辛未、初めて北郊を立て后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉獻す」、

「倭伝」、「建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝貢す。倭国の極南界にあり。光武、賜うに印綬を以つてす」

「安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う」

一五〇年代初め、天之尾羽張神が六代女帝に就いて間もない頃、弓矢で火神を祀つて三嶋流神国づくりを唱える面足神が主家の豊葦原中つ国をないがしろにして家長同然に振る舞い出した。つ

いで伊都国と結託して倭奴国王朝の実権をかすめ取り、攝津三嶋（大阪府茨木市）に遷都した。

彼の旗下には、山の神一門の大山祇族、石の神一門の伊和族、オロチ族の小千氏ら名だたる豪族がひしめいていた。方や、東方の要職にあつた大倭家は、お役ご免も同然になつてしまった。

この頃、名ばかりの天神だった天之尾羽張神は、王朝創設期のごとく天之国一門を結集して、わが手に天下を取り戻すべく奔走し始めた。彼女は鉄剣による武装化を押し進めて、伊都国を押さえ込み、自身や我が兒を伊都之尾羽張神として担がせるほどに盛り返してきた。

そうした中で、天之尾羽張神を親衛していた日隈（熊野家）の伊奘諾が頭角をあらわしてきた。

☆この時期に、天宮は糸島平野の平原に移されたらしい。

倭国大乱と邪馬台国

①一六〇年代前半、日隈の伊奘諾が日の神を親衛する家訓をかなぐり捨てて、神国づくりと天竺の常世づくりが共に実現できるかの如く言いふらしていた。彼の説くところは、こうだった。

「天竺では、仏法の下で常世づくりに奮闘した結果、大いに繁栄した。彼の国では生死が繰り返す中で、人間は前世の行為によって、生まれ育つ氏族や身分が予め決められているという。

支配者として誕生する日神は、天界に住みながら神々を治めて地上の政を取り計らい、夜明けになると人々を仕事につかせ、死者があれば魂を天に導き、然る後に地上に送り届けて蘇生させる、とのことだ。先ずは、天竺の国体をしかと支える身分制、つまり日の天神を頂点として月神・火神・風神・雷神と続く序列制を採用してから、常世づくりに取りかかつてみてはどうか」

「先祖を祀る者は、速やかに御魂の宿るべき子を探し出して、襲名準備を済ませておくことだ。さすれば、日神が地上に送り届けた御魂は、その子に宿つてこの世に生き長らえる。これを絶え

間なく実行するなら、必ずや常世が実現できる」

これが天之尾羽張神の興味をそそったと見たところ、こう上奏して面足の足元を突き崩した。
「王朝の開祖・天常立の教えてきたところは、天の国嫡流の姫君が日の天神に立ってこの国を導き、天神の御子たちがこれを守り通すことにありました。今一度、原点に立ち戻るべきでしょう」
四面楚歌に追い込まれた面足は、もはや隠居する他になかったが、その跡継いで三嶋大明神の異名ある大山祇神は、したたかに立ち回っていた。

伊奘諾が落ち目となった三嶋鴨族を抱き込みにかかる、彼は一門をがっちり固めた上で、伊奘諾の手の内や取り巻きを見透かした風をしながら、強気に出てきた。結局、伊奘諾は彼に面足の家督を継がせて養子に取り込み、神国づくりを手伝わせる以外に妙策は浮かばなかったらしい。
ついで伊奘諾は、天之尾羽張神を仰々しく六代天神に祭りあげること、天（水）軍・伊都軍を自在に動かせる鉄剣十握剣を賜った。つまり、王朝守護を託されたのだ。

これと引き換えに、瓊矛、日の鏡・熊の神籬など日隈神宝を天神天之尾羽張神にそっくり献納する次第となった。

続いて彼は、天神から神璽（倭王の印）としての瓊矛を賜るとともに、
「この王朝を草創期のごとく建て直せ。必要とあらば、自身が豊葦原瑞穂国・大倭厳・三輪氏の在所に乗り込み、当家の思うままに動く東方につくり変えてみせよ」
と下命されて、七代目倭王に昇りつめた。それは、一七〇年代に入ってからのことだ。

「伊邪那伎記」、「天津神、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱に、『この漂える国を修め理り固め成せ』と詔りて、天の沼矛、（瓊矛）を賜いて、言依さしたまいき」

②当時、伊奘諾は多くの皇子に恵まれていた。伊勢神道によれば、海神、大山祇神、熊野櫛御氣野、甕速日神（武甕槌の父、天之尾羽張神の子孫）、建御雷男神（経津主、伊都之尾羽張神の子孫）、住吉三神などだ。いずれも、他家からやってきた養子や養女だった。

この外にも、豊葦原中つ国からやって来る稚産霊（厳香来雷の娘）らがいた。その中で、彼は熊野櫛御氣野に期待を寄せて、日隈の金城湯池だった熊野村（紀伊国牟婁郡、和歌山県那智と三重県熊野）を任せきった。この皇子が首尾よくここを鎮撫できれば、日隈（熊野家）の跡継に立つという噂まで広まっていた。彼が父と同じく熊野姓であるのは、これを裏づけている。

皇子も仏陀の心でもって政や神国・常世づくりに勤しみ、時には仏陀ゴータマの逸話まで持ち出して教え諭すことがあった。そのことから、牛頭天王の名で慕われてきた。

そうした中で伊奘諾は、闇見国の王女だった伊奘冉を大妃に娶り、月神に持ち上げた。まもなく、二人の間に嫡男の日子、続いて二男の火軻遇突智が誕生した。

これに加えて、伊奘諾は十歳に満たない天之尾羽張神の愛娘（孫？）、つまり日嗣の御子であるである向津姫や、育ち盛りの素戔嗚を養子に押しつけられ、このように申し渡された。

「向津姫を若い女神役（稚日女）に仕立てて共に国中を駆け巡り、統治体制を固めよ。向津姫が成人したなら日隈から婿をとり、姫を天之国の天照大神に、ついで日の天神に祭り上げるように。当然、夫の方は豊葦原中つ国に君臨しながら、倭奴国王と伊都国王に昇ることになる。」

熊野家の家督相続や神宝の処置については、素戔嗚が成長した時点で取り決めればよい」早い話が、伊奘諾はその間のつなぎ役でしかなかった。

援者が淡路洲・二名洲ふたなのしま(四国)・筑紫洲・壱岐洲・対馬・隠岐洲・佐渡洲・越洲こしのしま(北陸道)・吉備児洲・五島列島にまで広がっていた。これが伊弉諾の治める国域だった。

この国づくり策を短期間に列島の隅々まで及ぼすには、生ぬるい融和策よりも、日隈・天之国・豊葦原中つ国が一丸となつて畿内に乗り込んで行き、大山祇神・大倭国ともども力づくで在地勢を押さえつけるのが手っ取り早いと思われた。そこで、淡路島に飯宮を築こうと決意した。

「伊弉諾紀」、(伊弉諾尊)、『吾、国を得む』とのたまいて、瓊矛ぬぼこを以て指し垂くだして探りしかば、オノゴロ島を得たまいき、「二の神、彼の嶋かに降り居あまくだまして、八尋やひろの殿とのを化作みたつ」

☆淡路島の南に浮ぶ沼島ぬしまは、オノゴロ島伝説を伝える。沼島の東南海岸に、高さ三〇〇以上の矛先ゆきそっくりな奇岩が、天に向かつてそそり立っている。その姿は、巨岩の逆矛と思わせる。

④この時代、いかなる国があったのかという点、奈良盆地には、面足期に鳴かず飛ばずに陥った大倭家が、伊弉諾政権に変わるや甦よみがえってきた。伊弉諾は東方に有力な分家を持たないことで、由緒があつて儀礼に明るく、しかも配下を多数抱える大倭家を従前の地位に返り咲かせた上で、東方統治の立て直し役や、面足の見張役を押しつけていた。

三輪山西麓こおろちにあつて小蛇とも呼ばれる三輪氏も、甦よみがえってきた氏族だ。伊都国王朝に干され続けた彼らは、倭国の隆盛を見越して早々に寝返ってきた。近頃では、天之尾羽張神にすり寄つて兵働ひらたきする一方、東方の世情や大倭王の言動を何もかも天下の女主人に告げていた。

淀川流域では、豊葦原中つ国一門の豊葦原瑞穂国が再び力を盛り返してきた。

摂津と播磨では、主家の豊葦原瑞穂国から独り立ちして、三嶋鴨族の上に立った大山祇神が摂津三嶋に本拠を構え、明石海峡や西播にまで目を光らせていた。その軍事を司る伊和族いわや小千族おちは、

めつぼう強いことで定評があった。とりわけ伊和族は明石郡から高砂にかけての地盤を堅持してきて、金城湯池の明石浦近辺に磐石（伊和邑）という城郭を構えていた。

尾張と丹後には、豊葦原中つ国一門の尾張海部氏本家や丹後海部氏分家が従前どおりの地位と権力を保ったままで踏ん張っていた。

当時の出雲地方には、宍道湖が今よりやや西寄りに広がっていて、出雲平野の西には神門水海という大きな内湖が広がっていた。斐伊川もこの内湖に注ぎ込んでいた。

ここでは、豊葦原中つ国がおつとりと構えていた。中興の祖・厳香具土につながる厳香来雷は、倭にびったり寄り添うことで、出雲だけでなく、伯耆・因幡・安芸もどうにかこうにか維持してきた。そうした中で、闇見国は筆頭職として豊葦原中つ国一途に支えてきた。

それが面足政権に移るや、素性の定かでないよそ者がオロチ佐太国の大穴持に躍り出てきて、瞬間に杵築国の大國主に昇り、ついには豊葦原中つ国を凌ぐほどの勢いとなった。そのため、面足と縁続きの佐太国の面々は、豊葦原中つ国を見下したり、下克上しながらに振舞ったりした。

その間隙をぬって、熊野山（天狗山）を神奈備山とする出雲日隈が意宇平野に乗り出してきて、豊葦原中つ国の所領を食い荒らしていた。

⑤この状況下で、彼が目指した国づくりの狙いは、何だったのか。それは表向きには、

「日の天神を頂点として月神・火神・風神・雷神と続く天竺三流序列に切り替える中で、黄帝期の六合（天地四方）制や神国・常世づくりを押し進めて行き、いつの日か徳治と不老不死の世の中を實現する」という文句に尽きた。

次なる目標は、地理的に見てわかるように豊葦原中つ国でしかなかった。その手始めとして、

序列を乱した大穴持を政権内に抱き込む一方、佐太国を引きずり下ろして、そこに火神と月神を称える闇見国を返り咲かせもした。

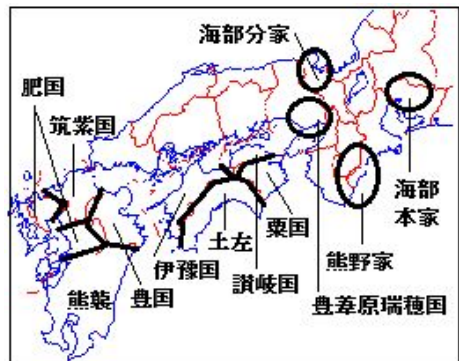
本家の豊葦原中つ国に対しても、厳香来雷かぐつちを再度引つ張り出して杵築国の大国主に、ついで弓矢・火神を奉る豊葦原中つ国の国主に持ち上げてみせた。と同時に、日隈軍に四六時中、彼を親衛させることで、闇見国が豊葦原中つ国一門の取りまとめに心置きなく走り回れる体制も整備してきた。

続いて彼は、このやり方を東方にまで浸透させて民心を一気に引き寄せ、王朝草創期を上回るほどの勢いを再現しようとして動き出したのだ。

事が思い通りに運べば大倭豊秋津島の下で、水神が火神や日の神を担ぐ四力国、即ち紀伊・熊野に日隈率いる国、淀川中下流域の摂津東部に瑞穂の大国、尾張と丹後に両海部家が揃い踏みして、天地創造の神話や五帝期に則った六合制くはくしがみごと再現できることになる。

これに先立ち、筑紫島を筑紫国・豊国・肥（日、火）国・熊襲にきつちりと分割し直したのだ。豊葦原中つ国も島根半島に杵築国・佐太国・闇見国・三穂（美保）国を一系列に並べ置いたのは、知つてのとおりだ。

この考えの下で大倭豊秋津島を中心にして、紀伊と熊野に真名子の養子が水穂の国々を従える熊野家、豊中・茨城から難波にかけて、実子の火軻遇突智ほのかぐつちを火神王に担ぐ豊葦原の千五百秋ちいほあきの瑞徳国、尾張熱田に海部本家、丹後宮津に海部分家を配置して東西南北四方の守りを固めた。



大倭家も月の国と称し、月の都（田原本町唐古）や東方に睨みを利かせていた。

⑥その後の彼は、筑紫島にあつて出雲での序列策をゴリ押しする一方、大妃に命じて畿内方との融和策を小出しにさせながら、オノゴロ島の砦化を進めていった。ついで、奈良盆地に月の都・副都を再建して、熊野櫛御氣野をそこに送り込んだ。

記紀は、この皇太神の生い立ちや事跡について何一つ記さないが、多くの古社が祭祀や縁起の中で彼の存在を伝えてきた。それらをまとめると、このようになる。

「中国に渡来したマガダ国王は天台山にこもつて修行していると、たちまち天台道教の山王に担がれた。その後は島根半島に流れて来て、しばし加賀潜戸で修行して

いた。そこでも、彼の仁徳や非凡さが知れ渡つて佐太国の大穴持に、ついで杵築国の大國主に持ち上げられ、さらに豊葦原中つ国の建て直しを懇請されたことで、神皇産靈や国常立を襲名した。

当時、神国・常世づくりに四苦八苦していた伊奘諾は、大穴持が天竺の常世思想に加えて仏教や学問にも並外れた才があると聞くや、天竺を凌ぐ常世を実現したいとして養子に取り込んだ。

その上で、彼の後釜に、豊葦原中つ國中興の祖・巖香具土いつのかぐつちにつながる巖香来雷かぐつちを大國主に担ぎあげたのである。」

こうして、大穴持は伊奘諾の愛児（真名子）となつてとんとん拍子に出世し、豊受（天照）皇太神の位に昇りつめた。その結果、皇太神は、熊野櫛御氣野、豊受皇太神・天照皇太神、大穴持・大國主・御饌津神・月読命、牛頭天王の名も合わせ持った。後になると、天照大神、天叢雲あめのむらくも、熊野権現、熱田明神、伊勢大神として崇められた。



対する皇太神は、かつての天叢雲の治世再現をかかげて、三輪大物主・大倭敵と組みながら、王朝の切り崩しや新王朝樹立に動いた。結果、唐古（田原本町）に都するオロチ系敵之国王朝が再現、即ち邪馬台国やまとが誕生し、皇太神が大蛇オロチの天照大神と語って都入りする事態に急転回した。この間に、畿内の伊弉諾勢は力尽きた。日ごとに情勢が悪化する中で、邪馬台国が揺るぎない存在とわかるや、天之尾羽張神に仕えてきた天之国一門や葦原中つ国系の主従らは、一斉に雲隠れしたり、副都落ちして吉野の山間に逃げ込んだり、はたまた天照大神にすがりつくなどして生きのびる手立てに走った。その最中に、太氏も大倭国も敵方に乗り換えたらしい。

これを契機に、小蛇こおろちと呼ばれた三輪大物主は太氏と組んで大神おおみかみなる家を興し、天照大神を家長の倭大物主に担いだ。以後、大神家が倭家の立場にとって代わった。

双方は、出雲の闇見国（黄泉国）で天下分け目の決戦に臨んだ。その時、天照大神は往年の敵之国王朝を率いた天叢雲を襲名し、新造した天叢雲剣（中細銅剣）をかざして決戦に大勝した。その勢いで、天羽羽は北九州も席卷すると、豊葦原中つ国を牛耳り、天鹿兎山と語り始めた。

⑨黄泉国から脱出した伊弉諾は命からがら都にたどり着くと、日子・向津姫・素戔鳴・五皇子三皇女を連れて日隈の本拠・熊襲に落ちて行つた。その最中に、瓊矛が行方不明になってしまった。この間にも、早々に都落ちした民衆が、続いて大山祇軍・伊和兵・小千兵が熊襲に逃げ込んだ。最後に、殿を勤めた住吉族・海神族が落ち武者同然の姿に成り果て、宮崎平野にたどり着いた。

ここに至って、天之尾羽張神も伊都之尾羽張神も、彼から離れた。豊国も日和見を決め込んだ。天照大神は、敵の金城湯池をこっそり手にした上は、これ以上の殺しあいには利するところがないとして、戦闘停止を命じた。事態を沈静化するには、敵の無力化を図れば済むことなのだ。

それには海神を手なづける一方、大山祇神に攝津・播磨の所領安堵を言い渡すだけでこと足りた。

ここに、天下は日の国から水穂（水火）の国に移った。この天下の入れ替わりが倭国大乱だ。

騒動が一段落すると、火天神は稚産霊の娘で、豊受皇太神（天照大神）の養女となった豊受姫を妃に娶り、長子の饒速日（ニギハヤヒ）をこしらえた。ついで日子坐王（ヒコイマス）に恵まれた。

その後、天照大神は纏向的都づくりに力を注ぐ一方、尾張・伊勢・志摩・熊野・出雲・丹後宮津へ駆け巡っては、その仮宮に滞在しながら常世づくりに精を出していた。

⑪いよいよ、伊弉諾が例の詔を降す時がやって来た。穢れを落とし身も清めて禊祓いする中、「自ら倭王を降り、神国づくりに打ち込む」と宣下する儀式だ。彼はこれを「あわき原の一ツ葉浜（宮崎市）で行う」と公表して、向津姫・素戔嗚・女神大山祇神・住吉三神・海神らと儀式に臨んだ。

「伊邪那伎記」、左の御目を洗いたまう時に成れる神の名は、天照大御神。右の御目を洗いたまう時に成れる神の名は、月読尊。次に御鼻を洗いたまう時に成れる神の名は、素戔嗚尊」
式に立ち会った民衆や、天之国・住吉三神・女神大山祇神は、これを思い思いに受け取った。

「鐘山なる神（燭龍）の伝説では、左目は太陽、右目は月を表す。また天地創生の伝承でも、盤古が死ぬ時、その体は天地の万物と化して左目は太陽に、右の目は月になった」、

「いや、向津姫の手をとって左目を洗ったのが重要なのだ。左目は太陽を指すから、向津姫はい

ずれ天神の日神に担がれることになる。それにしても、日神を補佐する月読尊（ツクよみ）とは誰のことか」「それだけではない。伊弉諾は、天神の御子である向津姫を天之国の天照大御神に担ぐおつもりだ。ついで日神に担ぐとあらば、倭国王朝の再興に突っ走ると公言したに等しい。すると、月読尊は、皇太神に相違あるまい。皇太神が日神に従わなければ、彼を討ち取る以外になかるう」
一同は伊弉諾の心情をこう察しながら、向津姫に服従を誓った。儀式が終わると、人々は向津姫が天照大御神に昇ったとして祝福し、この地を天之国の神座にちなんで日向と呼んできた。